

ブラジルの舞踊の文化人類学的研究およびサンバ教材化研究

社会学研究科3回生 林 夏木

1. 研究内容

16～19世紀後半までの約350年間に、西～中央アフリカの広域からブラジルに連行された奴隷数は約360万人とも言われている。主にヨルバ、バントウ、フォンなどの民族文化と、現地のインディオや入植者ポルトガルの文化などとの融合から生まれたブラジルの舞踊を文化人類学的見地から考察し、「奴隷達はなぜ踊り続けたのか」、さらに、「奴隷の子孫達は何を受け継ぎ現在も踊り続けるのか」について明らかにする。また、ブラジルを代表する舞踊である「サンバ」のルーツ「サンバ・ヂ・ホーダ」の教授法と教育現場での実践の現状を調査し、日本の学校体育におけるフォークダンス学習に適用するサンバの教材化を目的とする。

2. 渡航の目的と現地での活動

◇ブラジル・バイーア州ヘコンカヴォ地域 (8/27-9/15, 2019)

この地域を調査地とした理由として、奴隷船が最初に到達した港町サルヴァドールを州都とし、サンバやカポエイラなど多くのアフロ・ブラジル文化の発祥地であることである。渡航目的は以下3点: 1) 先行研究および各種資料の収集、2) 各種舞踊シーンにおける現地調査、3) 公立小中学校・州立舞踊学校におけるダンス授業の視察見学、であった。サルヴァドール市内のバイーア連邦大学(以下UFBA)、バイーア州立舞踊学校(以下FUNCCEB)、公立小中一貫校にて、研究者3名および舞踊講師2名を対象に聞き取り調査および舞踊の観察・参与観察を実施した。また、Santo Amaro、



図1 ヘコンカヴォ地域の地図 (縮)
<https://www.pinterest.jp/pin/1013008772298541/?p=2ue>



図2
サルヴァドール市路上にて
(筆者撮影)

São Braz、Saubara など郊外の地を訪れ、サンバ・ヂ・ホーダ他アフロ・ブラジル舞踊の継承に関わる人々に聞き取り調査を実施した。

◇米国・カリフォルニア州サンフランシスコベイエリア (2/27-3/12, 2020)

渡航の目的は以下3点: 1) 舞踊人類学者 Yvonne Daniel PhD への聞き取り調査、2) UCバークレー校「文化人類学図書館」での文献・資料収集、3) 公立小中学校・ダンススクールにおけるダンス授業の視察見学、であった。3) については、小中学校の視察見学は実らなかったが、私立小学校にてダ



図3 Y. Daniel PhD (筆者撮影)

ンス指導を行なっているブラジル人教員1名と、自主運営により成人対象にブラジル舞踊を指導する日本人講師1名への聞き取り調査を実施した。1) 2) については予定通り実施し、Daniel への聞き取り調査は3回(1回3時間程度、合計約9時間) 実施した。

3. 研究の成果

奴隷とその子孫にとって「踊ること」は、差別や貧困という現実からひと時の喜びをもたらすだけでなく、アフリカのアイデンティティの確立と自尊心を培うための重要な手段であることが、聞き取り調査の結果から明らかとなった。ブラジル政府は、2003年の教育基本法より人種主義の撲滅を目的としてカポエイラなどの身体技法を含むアフロ・ブラジル文化と歴史の教育が義務化した。またバイーア州の教育省は、2007年より「身体・芸術・文化の教育推進プロジェクト」を立ち上げ、さらに2014年には、「Atividades de Dança: ダンス活動」を追加し、公立学校における舞踊教育の強化に着手した。しかし、教育現場におけるサンバを含むアフロ・ブラジル舞踊の実践は、サルヴァドール市内の低所得者地域における6つの小学校において0校あり、それ以外の地域でも極めて少ないことが舞踊関係者への聞き取り調査から明らかとなった。また、郊外のSanto Amaro、São Braz、Saubaraでも、舞踊を含む文化の継承や教育は地域のNPO 団体等が担っていた。この理由として、サンバやアフロ・ブラジル舞踊はカーニバルや祭り等で見様見真似で習得するものであり、公立学校で教えられるものではない、という概念が人々の中に根強いことが考えられた。UFBA、FUNCCEBの参与観察において得られた舞踊の教授法も参考に、サンバ教材の指導例をまとめた。

図1 フォークダンス学習としてのサンバ教材 (小学校高学年対象の指導例)

サンバの由来なぜ踊るのか?	ポルトガル植民地時代、アフリカからの奴隷達が、仲間や家族との絆を深め喜びを共有したり、過酷な労働や貧困の苦しみを一時的に癒す目的があった。また、祖国アフリカへの思いや誇りも込めて、自分の存在価値を認める意味もあった。さらに、アフリカのリズムに合わせて踊ることで、先祖から伝わる体の使い方を継承する目的もあったと考えられる。奴隷制は19世紀末に廃止されたが、現在でも同様の目的で踊っている人達は多い。
サンバの特徴	音楽と他の踊り手に触発されながら即興で踊る。生演奏では、踊り手は音楽の変化に反応して動きを変化させ、また演奏者も踊り手の動きの変化に応じて音楽を変化させることで一体感を生む。また、演奏者と踊り手で円(ホーダ)を作り、その中心で一人または複数で踊る「サンバ・ヂ・ホーダ」がサンバのはじまりと言われている。
使用する音楽	音楽は本来、歌、打楽器、ギター等で編成され、演奏者と踊り手のコミュニケーションが重要であるが、授業ではCDやMP3を使用するため、基本リズムが打楽器でしっかり刻まれ、コール&レスポンスの簡単な歌も入れられる音楽が望ましい。教師や児童が学校に既存する打楽器で簡単なリズムを演奏することも一案である。
基本のステップ指導法	全身をできるだけリラックスさせるため、最初に体の各パーツを緩め、骨盤を揺らしながら歩行する等を行う。基本のステップを移動せず足の裏全体で踏み、その後、前後左右の移動へと発展させる。手拍子や口唱歌、可能であれば歌を入れながら踊ることを目指す。
サンバ・ヂ・ホーダ指導法	サンバ・ヂ・ホーダでは、他者との絆を深めたり、喜びを共有するダンスであることを意識して、円(ホーダ)の中心で踊る人を他の人達が歌や手拍子、打楽器などでサポートする。「褒めて育てる」を基本に、踊りを通し各児童が安心して自分を表現すること、それによる自己肯定感の向上を目指す。基本のステップを繰り返しながらも、リズムに喚起・誘導される動きをそのまま素直に体で表すよう促す。